Akita University

研究報告：秋田大学保健学専攻紀要23(1)：45－51，2015

「死への準備教育」がかかえる問題点
―われわれは死を知ることが可能なのか―

新　山　喜　嗣

要　　旨

生涯にわたって死を学ぶことを目的とする「死への準備教育」は，本邦では主にデーケンによって主導され，市民運動として粘り強く現在まで継続されてきた．しかし，本稿ではこの「死への準備教育」が，ある重要な点を前提としたまま進められてきたことを指摘する．それは，人間は死の本質的な事態を知ることができ，また，それを他者に伝達することができるとする前提である．ただし，このことはそれほど自明なものではない．実際に，死の本質的な事態である生の断絶という絶対的な非存在について，人間は知ることも正視することもできないという意見が存在してきた．また，「死への準備教育」に根拠を与える，必然的な死の存在はわれわれの生そのものに価値を与えてくれるとする主張に対しても否定的な意見が存在する．このような否定的な意見の代表的な論者であるジャンケレヴィッチの言葉に耳を傾けつつ，「死への準備教育」がもつ，人はできる限り死の多くを知るべきという理念が，すべての人々に適用されることには慎重であるべきことを提案した．

Ⅰ．はじめに

いつの時代にも，われわれの間に飛び交ういくつかの言説があったはずである．さしあたり，現代のわれわれが共有する死にかかわる言説の一つは，おそらく次のようなものであろう．それは，―かつて死はわれわれの身近にあったが，近代から現代にかけて非日常化され，病院という人々の目に触れにくい暗所に隠蔽されてしまった― という言説である．それは，死がもはや封印されて，死を語ることさえタブーとなったという極端な主張にまで発展することになる．たしかに，予想を超えた現代医療の進歩や家族形態の急激な変化といった特殊近代的な要因によって，病院や施設で臨終を迎える人々の割合は増えている．また，本邦を見渡す限りにおいては，それまで生活の隅々に密着していた多くの宗教的儀礼が，近代に至って日常の習慣から姿を消しつつある．このような目に見える社会の事象は，かつて死はわれわれが慣れ親しんだものにもかかわらず，いつからか死はわれわれに疎遠なものになったとする，先の言説に見かけ上の根拠を与えているのかもしれない．

実のところ，本小論は後述するようにこのような言説に対して決して賛意を示すものではない．しかし，少なくともこのような言説がゆきわたり始めた時期に，満を持すかのように人々の耳に触れるようになったのが「死への準備教育」である．この「死への準備教育」は，本邦では1980年代よりアルフォンス・デーケンが先頭に立って提唱し，死に関わる多方面の具体的な知識を，大人はもとより初等・中等教育を受ける子供達も含めて得ることができるように援助することを目的とする運動である[1]．このような運動は，デーケン自身が「生と死を考える会」を主催し，学習会を通じて全国の市民運動にも影響を及ぼしていることはよく周知されているところである．

秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻

Key Words: 死
死への準備教育
生の意義
死の存在論
ジャンケレヴィッチ

Akita University

本小論は，このような「死への準備教育」に対してそれが抱える問題点を指摘しようとするものである．もちろん，この運動が緩和ケアを含む医療システムに与えた肯定的な影響や，個々人のレベルにおいて死の苦痛を軽減させることに果たした役割などは正統に評価されるべきものであると思われる．しかし，「死への準備教育」にはそれ自身が抱える原理的な矛盾があると筆者は考えるものであり，いったんその問題点を明白にした上でこそ，われわれの死に対する思考は次のステップに進みうるものと信じたい．次章では，「死への準備教育」の概要を説明し，次々章以降においてこれに対する批判的検討を試る予定である．尚，前述のように「死への準備教育」は全国的な拡がりをみせているからこそ，その枝葉となる部分は各地の実態に合わせて変更がなされている部分があるものと推察される．ただし，その目的や方法の中心となる部分はあくまでデーケンの提案を原点としていることはまちがいなく，本稿ではデーケンの主張そのものに焦点をあてるつもりである．

Ⅱ．「死への準備教育」の概要

デーケンは「死への準備教育」をいくつかの観点から説明を試みるが，もっとも明解にその全容を把握できるのは彼が十五の目標として提示したものであろう．それらを簡単に列挙すると次のようになる[2]．(1) 死へのプロセス，ならびに死にゆく患者が抱える多様な問題とニーズについて理解を促す．(2) 生涯を通じて自分自身の死を準備し，自分自身だけのかけがえのない死を全うできるように，死についてのより深い思索を促す．(3) 悲嘆教育（グリーフ・エデュケーション）として，身近な人の死に続いて体験される悲嘆のプロセスについて理解することを目指す．(4) 極端な死への恐怖を和らげ，無用の心理的負担を取り除く．(5) 死にまつわるタブーを取り除き，死という重要な問題について自由に考え，また話すことができるようにする．(6) 自殺を考えている人の心理について理解を深め，また，いかにして自殺を予防するか教える．(7) 告知と末期癌患者の知る権利についての認識を徹底させる．(8) 死と死へのプロセスをめぐる倫理的な問題への認識を促す．(9) 医学と法律に関わる諸問題についての理解を深める．(10) 葬儀の役割について理解を深め，自身の葬儀の方法を選択して準備するための助けとする．(11) 時間の貴重さを発見し，人間の創造的次元を刺激し，価値感の見直しと再評価を促す．(12) 死の芸術（アルス・モリエンディ）を積極的に習得させ，第三の人生（老年）を豊かなものとする．(13) 個人的な死の哲学の探究．文化的・教育的背景によって制約された死に関する社会的・心理的・イデオロギー的固定観念から人間を解放し，各人が死について自分なりの個性的な理解を自由に選び取ることができるよう積極的に援助する．(14) 宗教における死のさまざまな解釈を探る．その際，生きがいと死にがいの相互関係についても考察する．(15) 死後の生命の可能性について積極的に考察するよう促す．その際，根源的希望が現在の生活に占める重要な役割を理解する．

以上の十五項目にわたる目標に対して，デーケンによれば知識のレベル，価値観のレベル，感情のレベル，技術のレベルの４つのレベルにおいて達成が目ざされるべきであるとされる．また，当初より生涯教育を趣意としており，「子供に対して」，「中・高校生に対して」，「大学生に対して」，「中年期の危機に際して」，「第三の人生（老年）に臨んで」といった項目に分類されており，全ての年齢層を教育の対象としている．尚，彼は「死への準備教育」の課程内容として別に十八個のテーマを掲げるが，その内容は目標として前述した十五項目とほぼ重複することからここでは省略する．さらに，彼によれば「死への準備教育」は，「よりよく生きるための教育」としてのライフ・エデュケーションであるとされ，このような考え方は彼の以下の言葉に集約されていよう．―死を意識し，おのれの生きる時間が限られていることを自覚する時，人はかけがえのないこの人生の貴重さを改めて認識し，残された時間をより豊かにまた健やかに生きるべく努めるようになる―[3]．

Ⅲ．「死への準備教育」を支える前提となるもの

前章に示したように，デーケンは「死への準備教育」の目的を十五項目に分類して列挙したが，その中には，内容的に類似しており本来であれば融合すべき項目が別個に分類されていたり，また，意味的に階層構造をもつものが並列されたりしている．したがって，ややもすると中心となるべき主題が曖昧に見えてしまう提示方法であるように思われるが，しかしそれでも，デーケンには次から述べる２点の核心的な確信が基底にあることは容易に見てとれる．

１点目は，われわれが死を知ることができることはまちがいないという確信である．そもそも，「教育」という名を打つ以上は，教える側があらかじめ教えるべき内容を十全に知りえていることが前提となろう．それだからこそ，その内容を教わる側に伝達することも可能となるはずである．たしかに，「死への準備教

Akita University

育」での実際の場面においても，たいていの場合に教える側は教えられる側よりも多くのことを知りえているであろう．たとえば，葬送儀礼に関わる知識，疾病に関わる医学・心理学的知識，現代社会の生命倫理における主要な論点などがそれである．しかし，「死への準備教育」は先述した目標の（13）に死の哲学の探究を謳ってある通り，死の周辺にある文化や習慣だけではなく，直接的に存在論的な水準での「死の本質」に抵触しようとしていることは明白である．それは，次のようなデーケンの言葉からもわれわれは伺うことができる．―また，人生全体の意義は究極的には死をもって決定づけられ，定義されるものであるから，死への準備教育は同時によりよく生きるための教育でもある[4]．―

このようなデーケンの意図に忠実に沿おうとすれば，そのような死の本質に関わる一定の見解がすでに教える側にゆるぎなく保持されていなければならない．しかし，そのような死の本質に関わる知を何人かの人々がすでにもちえていることは，それほど自明なことなのだろうか．あるいは，われわれ人類の中でかつてそれを知りえたものが一人でもいたことを，どのようにしてわれわれは確認することが可能なのであろうか．もちろん，教える側と教わる側が一緒に考えてゆくとするような，たとえば勉強会等を標榜する教育形式が用いられていることもあるであろう．しかしこのような場合にも参加者の中に，少なくとも死の本質について何らかの知を提供しえる構成員が存在することが必要であり，それを前提にして「教育」は成立することになるはずである[5]．そのような知をわれわれはすでにいくらかでも手に入れているだろうか．あるいは，そもそもそのような知は手に入れることができるのであろうか．これは，デーケンの確信に対する筆者の疑念の開始点であり，次章ではこれを中心に考察を進めてゆく予定である．

デーケンがもつ確信の2点目は，彼がもつ宗教的な信念についてである．このことについては，本稿を待たずにすでに何人かの論者が疑問を提出していることでもあり[6)7)]，ここでは次のように簡単に確認しておくことにとどめたい．周知のように，現代人は自然科学による文明の恩恵を享受すると共に，自然科学が基礎とする無神論的な自然観を受け入れることに多くの人々が躊躇しない．このように生の真只中にあるときには世界に対する無神論的な理解をしていながら，目を死に転じたとたんに都合良く‘神による救い’を期待することにためらいを覚える人々は少なくないであろう．たしかに，先述した「死への準備教育」における目的の（13）には，‘各人が死について自分なりの個性的な理解を自由に選び取ることができる’という文が明記されており，デーケンも多様な死生観がありえることに対して一定の配慮をしようとする姿勢が見てとれる．しかし，次に続く（14）においては‘宗教における死のさまざまな解釈を探る’ことが目標とされ，（15）では‘死後の生命の可能性について積極的に考察するよう促す’ことが目標とされる．明らかに，（13）に記されている無神論的な思考をも広く許容する立場と，（14）と（15）に記されている宗教的な教義に裏打ちされた信念とは矛盾するものである．この矛盾は，「死への準備教育」の全体をとらえる上で決定的とならざるを得ない．なぜなら，目的とされる（1）から（13）までの各項目の内容は，価値連関の上で最後の（14）と（15）に依存する構造をもっており，すなわち，（1）から（13）までの目的は，さらに究極的な目的である（14）と（15）を達成するための具体的な手段と捉えることができるのである．そして，（15）には‘根源的希望’についても言及されており，これは，山崎が指摘するように[8]，デーケン自身が信奉するカトリック教義における「神の国での永遠の生命と希望」にきっちりと重なるものである．元来，「死への準備教育」は1960年代に米国や欧州のいくつかの国を起点として，大学における心理学や哲学の教育課程として始められ[9)10)]，英語では death education の呼称を与えられている．それを，デーケンが独自の意図を込めつつ「死への準備教育」と邦訳したのであるが，同じく山崎が指摘するように，わざわざ「準備」なる言葉を新たに挿入したのは，‘神の国に入る準備’という意図があったものと推量される．このように，目標点として一定の宗教上の教義が潜在していることは，万人にとって普遍的に適用されるべきとする「死への準備教育」のもつ本来の意図にとって足かせとなる可能性があろう．

Ⅳ．死は知ることが可能なのであろうか

当然なことであるが，人生における死がもつ意味は個々人によって多様であり，また人類の長い歴史におけるそれぞれの時代によってもそれは多様であったろう．このことに対しては，生活が異なればその生活に与える死のあり方も異なっていることから，誰もが容易に同意する事柄であると思われる．しかし，その一方で，ここでわれわれが銘記すべきことは，人間の死は人や時代の差異を越えて普遍的な死の本質に関わる側面をもつということである．すなわち，死を宣告されたものは，死の刹那において自身のかけがえのない唯一性が絶対的に消失するという現実の前に立たされ

Akita University

ることになる．そして，このような途方もない事態をこの世界の中にあってただ一人で引き受けなければならず，その刹那に決して同伴者がいないことを誰もが気づいているはずである．ここに，他に比類しようがない絶対的な孤独が発生する．しかも，唯一性の消失によってもたらされる自己の非存在は，その後に無限の時間にわたって続くのである．このような死がもつ存在論的な極限とも言える側面は，誰にとっても，あるいは，いつの時代にあっても，常に共通するものであろう．このような死の本質的な事態を，はたして人間は正視することができるのであろうか．

実のところ，「死から目をそらす」ことへの警鐘は，何も20世紀後半の death education の展開を待つまでもなく，われわれの文明の長い歴史の中でたびたび鳴らし続けられてきた．たとえば，古くはソクラテスが，その後にセネカが，近世ではモンテーニュが「われわれはもっと死を学ぶべきである」ことを繰り返して語ってきた．また，死を忘れて享楽的な人生を送ろうとする人々を戒めようとする，中世に始まったメメント・モリ（死を忘れるな）の運動やそれに連動するアルス・モリエンディ（死の芸術）は人々によく知られたところである．そして，人々が「死から目をそらす」ことにあらがうようなこれらの主張には，ある共通のモチーフが内包されていた．それは，必然的な死の存在は，われわれの生を反照的に照らすことにより，生そのものに意味と価値を教えてくれるとするモチーフである．つまり，死を気づくことが，それまでの殺伐として虚脱に満ちた生を，有意義で価値のあるものに変様させるとする考え方である．この考え方は，デーケンが「死への準備教育」で主張する，死を知ることによって人生の時間の貴重さを再発見することができるようになるとする考え方とほぼ重なり合うものである．

それでは，このように人生を意義あるものにするために，われわれは人生の最終地点にある死を見たり，あるいは，知り得たりすることができるのだろうか．これは，先に問題提起をしたまま放置していた，人間は死の本質的な事態を正視することができるのかという疑問に戻るものである．このような疑問に対して，「われわれは死と真正面から対峙することができない」と回答した人々がいる．たとえば，パスカルは ―死へと向かう人生において死の絶壁は，それ自身を見えなくする遮蔽物を常に必要とする―[11]と述べ，また，ラ・ロシュフコーは ―死は太陽と同じ様に決して正面からじっと見つめることはできない―[12]と述べ，さらに，ジャンケレヴィッチは ―死への言及はいつも寓意，宇言，周廻といった婉曲法にならざるをえない―[13]と述べた．これらはいずれも，死の鋭い断端を人間が直視することの困難さを述べたものである．

とりわけ，ジャンケレヴィッチは，われわれと時代をほぼ同じくしながら真摯で強靱な思索力によって，粘り強く死との対峙を試みた[14][15]．彼は，死について知りえるのは二人称や三人称である他者の死についてであり，自分という一人称の死については原理的に知りうることがないとして彼はこの事態を次のように言う． ―わたしは他の人々にとってしか死なず，わたし自身にとって死ぬことはけっしてなく，また同様にして，わたしの側では，他人が自身知らない他人の死をわたしだけが知る[16]．―およそ何かを見ることができるためには，見る主体と見られる対象との間に時空間上の関係があることが必要とするが自身の死にはそのような関係は存在しない．それならば，体験知というようなものが死について成り立つかといえば，彼によれば死の瞬間の短さは，閃光のひらめきや一瞬のまばたきとさえならず，死は知りうる内容を何ももたないとする．さらに，ジャンケレヴィッチは死は学ぶことも準備することもできないとして次のように言う．―セネカは，ルキリウスに「欲することは学ぶものではない」と書き送ったが，その例にならって，「死ぬことは学ぶものではない」と言いたくもなる．死に対する準備とは，あるいは単に人を煙にまく冗談にすぎないかもしれない．たしかに，習うといって，人はなにを訓練したらいいのだろう．（中略）人が覚えるのは，別々の要因に分解され，あるいは一片一片獲得することができる運動だ．だが，死ぬという行為は，部分もなく，あらゆる分析を拒むもので，一回で，ただ一撃で，いきなり即興することしかできない―[17]．たしかに，このようなジャンケレヴィッチの言葉は特段に death education を意識して述べられたものではない．しかし，彼の言葉は，死は習得されうるものではなく，それゆえに，習得しえた者がさらにそれを他者へと伝授することもできないことを物語っている．このことは，死の知が「教育」としてより多くの他者に伝播されてゆくことを意図する「死への準備教育」にとっては致命的となる．

そればかりではない．ジャンケレヴィッチによれば，死が生の時間に与える意義や価値といった死がもつわれわれにとっての肯定的な側面も徹底的に否定されてしまう．彼は次のように述べる ―死の非本質と非実存においては，すべてが絶望，落胆，落下だ．要するに，生の底にある死は，根拠ないしは基礎というようなものの正反対だ．死の深みは非意味の深みだ．（中略）意味にみたされた深みであるどころか，死の深みは空虚な深みだ．実存の意味と本質とが，同時に破滅

Akita University

させられている．死は生の原理ではない．つまり，死は生の根拠でも，時間上の源でもない―[18]このように，彼は死という存在が生に何らの意義も付与しないことを徹底して語る．さらにその上，彼によればわれわれの死は，生の意義を簒奪するものであるとさえされる．彼は次のように言う．― 生の終焉は，残念なことに，生の目標ではなかった．まるでそんなどころではない．むしろ逆が真実だ．生の終焉は，生の目的を否認する．（中略）《生きる理由》が生にその価値を与えるように存在にその価値を与えるこれらの存在理由を，非存在がわれわれから取り去ってしまう―[19]このように彼にとっては，死の中から肯定的な要素を汲み出そうとするこれまでのあらゆる努力が，彼の言葉を借りれば，「ごまかし」もしくは「見せかけの安心」とみなされてしまう．

それならば，「死があるからこそ生に意義をもたらす」とする「死への準備教育」を支える重要なテーゼも，ジャンケレヴィッチの主張に従う限り，虚しい努力とされる思念に過ぎないことになる．仮にそうだとすれば，このようなテーゼは，死の本質とは無関係な，せいぜい死に対する恐怖や不安を緩和するために考案された，人々がもつ心理的苦痛に対する防衛の一つに過ぎないことにされてしまう．ところで，以前の章に記した「死への準備教育」における目的の中には，‘極端な死への恐怖を和らげる’ことが謳われていた．このことは，デーケンがたとえ死に対して恐怖心をもつものがいたとしても，その恐怖心には一定の上限があってしかるべきであると考えていたことを示すものである．しかし，恐怖心に上限や下限がありうるのは，恐怖をもつ対象が経験的世界の中にある事象であるときであろう．しかるに，死は経験的世界の事象を越え出た，それ以上の事実である．ひょっとすると，生に削られた死の裂け目が底なしであるとすれば，それに対応する恐怖も底なしであるのは不自然ではないと主張する人々がいるかもしれない．もちろん，誰にとっても死にそのような恐怖が伴うことは望む所ではないし，筆者自身にとってもそうである．しかし，少なくともデーケンが考えるような‘適度な恐怖’というものがありえるのかは全く定かではない[20]．

このように，死の本質について語ろうとするとき，われわれにとって定かではないことがあまりにも多過ぎることを目の当たりにすることになる．実際に，死は知ることもできず生に何の意義も与えないというジャンケレヴィッチの主張に対して，われわれは即座に反論をすることができそうにない．もちろん，心理学的なレベルにおいては，死を知ることによって残された時間の大切さやありがたさを深く実感するということは十分に理解できることである．しかし，ここで問題となっているのは存在論的なレベルにおける死の本質と生との関係であり，このような議論はまだ人類の思考の開始点にあるに過ぎない[21)22)]．また，死そのものを対象として個体，同一性，時間といった形而上学的な観点から検討を試みる研究も20世紀後半から加速度的に為されているとは言え，最終的に意見が収斂する地点が見いだせるかは定かでない[23)24)25)]．それでも，「死への準備教育」はすでに発進しており，すでに数十年の歴史をもつ．その理由は明らかである．それは，われわれの叡智が死そのものを捉えることができる日を待たずに，今日も明日もこの世を去りゆく人々がいるというまぎれもない事実がある．ただし，本小論が主張したいのは次のことである．それは，われわれが死の隅々を知りえたと考えたとしても，その知は死の核心ではなく，おそらくそれは死の周辺部に浮遊する何事かであろうということである．死の核心は，いまだわれわれの知の彼岸にある．それにもかかわらず，もしも自分は死の全容を知りえたものと考え，そのことによって，あたかも「死を乗り越えた」，あるいは，「死を征服した」とする心理的な境地に達する人々がいたとすれば，それは明らかに錯視と呼ぶしかない．錯視はあくまでも錯視に過ぎず，いつかその綻びから死の核心の片鱗が姿を現わす危険に満ちている．あるいは，死の全てを知りえたとする誤解は，死の本質がもつ存在論的な脅威を人々に見せないようにする，いわば目隠しとして機能するかもしれない．これは，「死への準備教育」の死に関わるあらゆる知を得ようとする目標からするといかにも逆説的に見えるが，しかし，このとき「死への準備教育」は，現代におけるもっとも洗練された死に対する目隠しのシステムとして機能しているかもしれないのである．そして，その死に対する目隠しが不用意にでもはずされたときには，死の断端が示す鋭さが人々を驚愕させることになるかもしれないのである．

Ⅴ．終わりにかえて

本小論は先にも触れたように，決して「死への準備教育」をあますことなく否定するものでもなく，またデーケン氏個人を意図的に誹謗するものでもない．しかし，「死への準備教育」には前章で述べたような無視できない問題点が伏在しているのは明らかである．したがって，控え目に次のことは主張しておきたい．それは，「死への準備教育」がもつ，人はできるだけ死の多くを知るべきという理念が，すべからく万人に適用されることには慎重であるべきであるということ

Akita University

である．先述のように，死の本質がもつ絶対的な非存在は，生の現実と明らかに矛盾するものである．したがって，死を正視しようとしなかったり正視できなかったりする人々がいたとしても，決して不自然なことではない．なかには，生涯にわたって死を瞥見することさえなく，忽然と逝く人々もいるかもしれない．しかし，決して彼らは非難されるべきではないであろう．「死への準備教育」の目標にある‘個人で自由に選べる死への態度’には，このような死を無視する生き方をも許容する寛大さが含まれるべきなのではないかと思われる．あるいは，場合によっては，個々人が死について知りたいとする範囲を教える側がそのつど把握しながら，その知りたい部分のみを教授するといった方法もありえよう．これは，先述の特定の宗教的教義から解放されるべきという課題と共に，今後「死への準備教育」が本邦の多くの人々に拒絶されることなく浸透するにあたって必要な課題であると思われる．

最後に，本稿では中心的な問題としなかった「死への準備教育」が抱える問題点に少しだけ触れたい．それは，現代における生命倫理学の主要なテーマとして議論がなされている問題に関連する事柄である．すなわち，「死への準備教育」の中には，現代の延命治療は過剰であるという主張，ガンの本人への告知はより進められるべきという主張，ヒトの死は脳死であるとする主張，人は死を受容するにあたって一定の段階を踏むという主張などがしばしば組み入れられている．ただし，これらの生命倫理学の主要なテーマについては，多様な意見がありまさに議論の最中にある問題ばかりである．それにもかかわらず，「死への準備教育」ではこれらのデリケートな問題群についてすでに結論が出されたものであるかのように推進しようとしている点が問題視されよう．ただし，これについては生命倫理学における議論の展開に合わせて、「死への準備教育」はそのつど立場に修正を加えてゆけば済むことなのかもしれない．本小論は，「死への準備教育」が，その根幹となる人はなるだけ死の多くを知るべきとする立場についても，しなやかに修正を加えつつ，次の世代に引き継がれることを願いつつ書かれたものである．

文献と註

1）デーケン A：死への準備教育の意義．デーケン A，メジカルフレンド社編集部編集，死を教える，第１版，メジカルフレンド社，東京，13，1992

2）前掲（p6-45）（本著者による若干の改変と省略があり）

3）平山正実，デーケン A：身近な死の経験に学ぶ．春秋社，東京，1986

4）前掲１）（p2）

5）このように本稿では教える内容としての知がそもそも存在しえるかを問題にしようとしており，いわゆる「教育学」の方法論に関わる議論とは水準を異にしていることをここで確認しておきたい．

6）大町　公：死への準備教育―特に大学生に対して―．奈良大学紀要，20：13-21，1991

7）山崎　亮：死はいかにして教えられるのか―「死への準備教育」を考える―．福祉文化，1，47-60，2001

8）前掲（p51-52）

9）Rosenthal, N.R.: Adolescent death anxiety: The effect of death education. Education. 101, 95-101, 1980

10）Smith, T. L. &Walz, B. J.: Death education is paramedic programs: A nationwide assessment. Death Studies, 19, 257-267, 1995

11）前田陽一，由木　康　訳，パスカル著『パンセ１』，中公クラシックス，中央公論新社，東京，2001（p132）

12）田中仁彦：ラ・ロシュフコーと箴言．中央新書，東京，1986（p216）

13）Jankélévitch, V.: La Mort (1966)，仲澤紀雄訳『死』，みすず書房，東京，1977 邦訳（p64）

14）前掲13）

15）Jankélévitch, V.: Penser la mort? (1994)，原章二訳『死とはなにか』，青弓社，東京，1995

16）前掲11）邦訳（p33）

17）前掲11）邦訳（p296）

18）前掲11）邦訳（p74）

19）前掲11）邦訳（p75）

20）これは筆者の私見であるが，恐怖や不安といった感情は本来的に経験的世界の事象に向けられるものであり，経験的世界からはみ出した事象としての死は，始めから恐怖や不安自体と接点をもたないものと考えられる．

21）細川亮一：恐れと驚き―死と生への問い．死―現代哲学の冒険１．市川 浩，坂部 恵，村上陽一郎，加藤尚武，坂本賢三編，岩波書店，東京，1991，pp1-79

22）新山喜嗣：死が照らし出す生の意義と時間の形而上学―不死を妄想主題とするコタール症候群が示すもの―．生命倫理，24：186-196，2014

23）Silverstein, H. S. "The Evil of Death" Journal of Philosophy, 77: 401-424, 1980

24）Yourgrau, P. "The Dead" Journal of Philosophy, 86: 84-101, 1987，村上祐子訳『死者』，現代思想：可能世界／固有名，青土社，東京，1995，pp193-208

25）新山喜嗣：自分の死と他者の死は誰に関わることか―死の形而上学へのカプグラ症候群からの問いかけ―．生命倫理，17：82-92，2007

Akita University

Can death education really teach us about death?

Yoshitsugu NIIYAMA

Graduate School of Health Sciences, Akita University

Abstract

The aim of death education is for people to learn about death and to apply that learning in life. Deeken was a main proponent of death education in Japan, which is now actively continued as a citizens' movement. However, in this paper, I point out that important premises of death education lack positive proof, namely, that a human being can understand the essence of death and that its essence can be transmitted to others easily. It is not obvious that these premises hold. In fact, some are of the opinion that humans can neither comprehend the mortal essence nor look at it directly. In addition, proponents of death education claim that death gives meaning and value to life, but others make an argument to the contrary, death gives us nothing. We should consider the words of Jankélévitch, a representative proponent of this contrary view. In this paper, I suggest that we should be more careful not to apply the aims of death education to all people, especially in Japan.